

## ペテロの第二の手紙3章1-9節 「再臨が遅れて見える時」

### 1A 純真な心 1-2

1B 記憶による振り立ち 1

2B 聖なる預言者と使徒たち 2

### 2A あざける者たち 3-7

1B 欲望に従った生活 3-4

2B 水の裁きの後の世界 5-6

3B 火による裁き 7

### 3A 遅れない神 8-9

1B 一日と千年 8

2B 忍耐深い方 9

## 本文

ペテロの手紙第二3章を開いてください。私たちは、この第二の手紙において、霊的に成長するためにしっかりと捧げることについて読んでいっています。ペテロは、間もなく死刑になり、この世からいなくなります。その最後の言葉として彼が語っているのは、教会の中に偽教師たちが入って来ることです。その偽教師たちは、主が再び来られることを否定し、肉の欲望のままに生きることも厭わない異端の教えを持ち込んでいます。それでペテロは、この手紙を読んでいる信者たちに対して、新しい教えとして教えているのではなく、彼らも既に知っていることを思い起こさせる内容の手紙を書いています。私たちは絶えず、主に教えられたことを思い出し、聖霊の助けを受けて、愛と信仰の中で、それを保って行きます。新しいことは、あまり多くありません。むしろ、初めに聞いたことだけれども、それを思い起こすことによって、新しい御霊の働きにあずかることができます。

### 1A 純真な心 1-2

2章において、偽教師の悪い行ないについて告発した後に、3章において再び、「愛する人たち」と言って、彼らを励ます言葉を語っています。

### 1B 記憶による振り立ち 1

1 愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。

私たちは、いつも愛されている者たちだという安心感、保障がほしいですね。神から愛され、そして兄弟からも愛されています。ペテロは今、愛する人たちと呼んで、彼らに対する兄弟愛を言い表しています。

そしてこの手紙を書いている目的であります、「この第二の手紙」と言っています。彼は、もつと前に第一の手紙を書いていた。手紙一つで良かったものの、改めて第二の手紙を書いているということは、どういうことなのか？また、新たに書かなければいけないことがあるのか？という疑問に答えています。それは、「記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるため」と言っています。ペテロは既に、1章12節で「現に持っている真理に堅く立っているあなたがたであるとはいえ、私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとしているのです。」と言っています。

聖書の中には、何度も何度も、主が以前に語られたことについて繰り返して語られることが多いです。主がイスラエルに与えられた七つの祭りは、主がご自分の民に対して行なわれた良い業を思い起こさせるためのものです。記念とする、という言葉も出てきます。それを永遠のおきてとしなさいと言われていたのは、千年、二千年経っていても、それでも思い起こしなさいと言われていたのです。もし思い起こすことを彼らがしていなければ、イエス様が弟子たちと共に過越の食事をすることもなく、そこで主のからだ、主の流される血をいただくという聖餐でさえ無くなってしまったことになります。そして私たちは今、主が来られるまで主の死を思い起こすために、二千年近くも思い起こす作業をしています。そして、主は聖霊をご自分の代わりに、もうひとりの助け主として助けてくださると言われました。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊派、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。(ヨハネ 14:26)」

私たちは、聞いているからといって、それを知っているとは限りません。いや、数多く聞いてしまっているために、耳にたこが出来て、聞かなくなってしまうということがしばしば起こります。「もう聞いているから・・・」という思いが働いてしまい、実はまだ学んでいないのにも関わらず、そこから教わろうとする態度を失ってしまうのです。まさに、ユダヤ人の指導者たちがその過ちに陥っていました。聖書を知っているのに、その真理を悟ることができなくなっていた、心が頑なになっていました。それは、何か新しいことではなく、イエス様はモーセの律法また預言者を教えていただけでした。信じることを拒み、ついに信じることができなくなりました(ヨハネ 12:37-40)。弟子たちも、例外ではありません。覚えていますが、何度となくイエス様は、ご自分が十字架に付けられ、そして三日目に甦ると宣言されましたが、それを受け入れることができませんでした。そしてイエス様が捕えられる時に逃げてしまいました。主が甦られた後で、エマオの途上に行く二人の弟子に、律法と預言者から、キリストの受難について書かれているところを説き明かされました。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。」とイエス様は言われたのです(ルカ 24:25)。そして、弟子たちはイエス様が説き明かされた御言葉によって、思い起こすことができ、それで心が燃え始めたのです。

そして、「あなたがたの純真な心を奮い立たせる」と言っています。私たちの心は、初めは御言葉

を純粹に受け入れ、乳飲み子のもようであつたかもしれませぬ。ペテロが第一の手紙で、こう話しました。「1ペテロ 2:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粹な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによつて成長し、救いを得るためです。」ところが、私たちはいつの間にか、その純真な心が汚されていくことがあります。イエス様の土への種まきの譬えで、いばらのところに蒔かれた種が、芽を出すも、いばらによつて実を結ばなかつたとありますが、それは、いつの間にか富の惑わしや、思い煩いによつて実を結ばないということです。そして、悪い働き人がコリントの教会に入つて来た時、パウロは、こう言いました。「2コリント 11:2-3 私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。しかし、蛇が悪巧みによつてエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあつてはと、私は心配しています。」

これから、主の再臨の約束を否定する者たちらが現れるところを読みますが、イエス様は何度となく、眠つてゐることについて警告を行われました。主人に家を任された僕がいて、きちんと食事を与へてゐるしもべは幸いだが、「主人はまだまだ帰るまい」と心の中で思い、仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりしてゐる悪い僕が出てきます(マタイ 24:45-51)。主人に仕えてゐるのですから、初めは純真な心で主人の帰宅を待つてゐたと思ひます。けれども、その純真な心が汚れてしまひ、それで悪いことをし始めるよふになりました。それだけ、私たちらの心の心が純真なものから離れて行つてしまふものです。ですから、聖霊によつて常に心が純真に保たれていなければいけません。

## 2B 聖なる預言者と使徒たち 2

2 それは、聖なる預言者たちによつて前もつて語られたみことばと、あなたがたの使徒たちが語つた、主であり救い主である方の命令とを思い起こさせるためなのです。

ペテロが思い起こさせようとしてゐるのは、二種類の人々の言葉です。一つは、「聖なる預言者たちによつて前もつて語られたみことば」つまり、旧約時代の預言者たちのことです。そして、「あなたがたの使徒たちが語つた、主であり救い主である方の命令」つまり、新約聖書の使徒たちの言葉です。預言者たちと使徒たちというコンビについては、使徒パウロも話してゐました。「エペソ 3:5 この奥義は、今は、御霊によつて、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されてゐますが、前の時代には、今と同じよふには人々に知らされてゐませんでした。」旧約聖書、新約聖書の聖書全体の言葉を思い起こさせようとしてゐます。

旧約時代の預言者たちについて、「聖なる預言者」と呼んでゐますが、既に聖霊に動かされた人々であることを書いてゐます。「2ペテロ 1:21 なぜなら、預言は決して人間の意志によつてもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語つたのだからです。」聖なる御霊によつて導かれており、そうではなく私的解釈を施してゐる者たちらが偽教師であり、汚れてい

ます。ですから、「聖なる預言者」と敢えて言っているのでしょう。

エレミヤが預言をしている時に、彼は王たちに迫害されただけでなく、いやそれ以上に、仲間の祭司や預言者に迫害されました。彼の戦いは、外側よりも内側のほうが熾烈であり、神の言葉に真っ向から対立する偽の預言を行なっている者が数多くいたからです。バビロンにエルサレムが滅ぼされる、主に立ち返れというのが御心なのに、「神は、バビロンからエルサレムをすぐにでも解放される」と偽の預言を行ない、人々の心にある罪を取り扱うことをしなかったのです。エレミヤは、彼らに対してこう預言しました。「エレミヤ 23:28 夢を見る預言者は夢を述べるがよい。しかし、わたしのことばを聞く者は、わたしのことばを忠実に語らなければならない。麦はわらと何のかかわりがあるか。…主の御告げ。…」偽預言者は、私的解釈、つまり自分の心にあるもの、夢などを勝手に伝えているだけです。しかし、主ご自身の言葉を語り継ぐ時、それは麦のようなものであり、人を生かすものでありますが、夢を伝えていたら、藁のように神の裁きの火によって燃やし尽くされてしまいます。私たちは、勝手に自分の思いを神の言葉に投影させるような教えから遠ざからないといけません。

そして、使徒たちは、主の命令を伝えている人々です。主から直接聞き、それを伝えている者たちです。彼らの焦点は、主イエスご自身の言行であります。この方が何を行なわれ、何を言われたのか？この方を知っているということが、彼らの最も大事な問いかけでした。そして、こちらにも偽使徒もいました。主が命じていないことを教える、偽使徒がコリントの教会にいた事を教えています。「2コリント 11:13 こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。」そこで、ペテロは土台を敷いているのです、教会の土台はあくまでも聖なる預言者と使徒たちによる、主の命令であるということです。

## **2A あざける者たち 3-7**

### **1B 欲望に従った生活 3-4**

3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」

ここが本題です。「まず第一に」と訳されていますが、「第一に優先されることとして」という意味合いです。順番というよりも、優先順位です。何が第一にしないといけないかという、主の来臨の約束について、あざける者どもがやって来るということです。ペテロは、第二の手紙でこのことを強調していました。自分が死ぬ時が近づいていることを知って、まず初めに話したことは、1章16節、「主イエス・キリストの力と来臨とを知らせました」とあるところです。彼は、高い山でイエス様が変貌する御姿を見て、その威光を目撃しました。それに、もっと確かな言葉として預言があると述べています。こうやって、主が戻って来られると言う約束について、最優先に語っていたのです。

主が到来されることについて、旧約時代の預言者が語ったのは数知れません。私たちは、預言書をイザヤ書からマラキ書までずっと読んでいきました。何十回、いや、百回、二百回になるのではないのでしょうか、主はご自身が来られることを繰り返し示されました。そして、新約聖書では、主イエスご自身が何度も何度も、ご自身が戻って来られることを話されました。福音書、マタイもマルコも、ルカも、そしてヨハネも、全てが語りました。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。(ヨハネ 14:3)」そして使徒たちは、だれもが全て、手紙の中で主の到来を語っています。パウロも、ヨハネも、ヤコブも、ユダも、そしてペテロはもちろん、みな語っています。「ピリピ 3:20 私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」

ところが、偽預言者はそれを否定します。どうして、このことをあざけるのか？その理由は、「自分たちの欲望に従って生活」しているということです。主が来られるということは、自分の行ないについて裁かれる時であります。死んでいた者たちがよみがえり、その行ないに応じて裁かれます(ヨハネ 5:28-29)。ですから、主が戻ってこられないということであれば、甦りはないし、自分のしていることに対する報いもないですから、自分の好きなようにしていても、とやかく言われぬということになります。そのように嘯いている僕の姿が、マラキの預言にあります。「あなたがたは言う。「3:14-15 神に仕えるのはむなしいことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の益にならう。今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。悪を行なっても栄え、神を試みても罰を免れる。」

そして、キリストの来臨の約束がどこか、「先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」と言っています。この先祖たちというのは、アブラハム、イサク、ヤコブの族長たちのことです。先祖たち以降で約束されたメシヤ来臨の約束はあるけれども、何事も創造の初めから変わっていないではないか？ということでもあります。どうでしょうか？ここで、彼らが言っていることを、敢えて今の言葉にするならば、「斉一説」というものがあります。要は、今の自然が成り立っているのと同じように、昔もそうであったとするものです。つまり、天変地異という激変は起こらなかったという立場です。もちろん、通常は自然現象によって自然は変わっています。川が少しずつ土を侵食して行きます。けれども、マンモスの化石の中に消化しきれていない草が発見されたとかいうのは、何か大異変が起こらなければ不可能です。けれども、そのようなとつもない力の介入が自然の中に何もなかったとするのが、斉一説です。その用語はいつでもいいのですが、私たちもともとすると、心の中で「これからも、ずっと同じように今の秩序は続く」と思ってやいやしないのでしょうか？そのような考え方は、私たちの信仰を潰します。いつまでも何も同じよう変わらないのであれば、すべてを新しくすると言われたキリストへの希望が虚しくなります。

## 2B 水の裁きの後の世界 5-6

5 こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のこ



とばによって水から出て、水によって成ったのであって、6 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。

「こう言い張る彼ら」とペテロは言っていますから、これは比喻や仮定の言い方ではなく、列記とした主張だったのでしょう。ギリシヤ語には、「意図的に否定する」という意味合いもあるそうです。尤もらしい主張ですが、決定的に歴史的な出来事に欠如しています。そう、ノアの時代の洪水です。彼らが、「何事も創造の初めからのまま」と言っていますが、「天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成った」というのが想像の時の様子です。天は天で神は造られました。地については二日目に、大空の上にある水と、大空の上にある水とを区別されました。そして三日目に、その下にある水について、「天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」と主が仰せになりました。その乾いたところを、主は「地」と名づけました。ですから、聖書的には、地上に水があるというよりも、地が水から出てきたというほうが正解です。

主はこのように、創造の力を持って水から地を造られました。これがずっと続くと考え、あたかも当然の権利、あって当たり前だと考えることこそが傲慢なのです。主は、その創造の力を裁きの力に使うこともおできになります。主は敢えて、水の中から地上を出すようにさせただけで、それを戻すことはいとも簡単なのです。そして今の世界が、洪水後の世界なのだということを、この論者はすっかり忘れてしています。

### 3B 火による裁き 7

7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。

主はみことばによって、今の天地を火によって裁かれるということ、これは聖書にたくさん予告されています。詩篇 50 篇 3 節です。「われらの神は来て、黙ってはおられない。御前には食い尽くす火があり、その回りには激しいあらしがある。」イザヤ 66 章 15 節です。「見よ。まことに、主は火の中を進んで来られる。その戦車はつむじ風のような。その怒りを激しく燃やし、火の炎をもって責めたてる。」そしてマラキ 4 章 1 節には、こうあります。「見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。」そして新約聖書にも、テサロニケの手紙第二 1 章 7-9 節に、こうあります。「主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」黙示録には、数多く天からの火によって地上が裁きを受けている場面が出てきます。

そして、これは全ての人々が滅ぼされるのか？という、そうではありません。「不敬虔な者どものさばきと滅び」とあります。敬虔な者、主を求め、主を恐れている者たちは、2章において、ロトがソドムの火による裁きから免れたと同じように、免れることができることが書いてあります。「2:9 主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。」神の火による裁きから、キリスト者は天に引き上げられることによって救われます。

### **3A 遅れない神 8-9**

そして次に、ペテロは、「それでも、主の到来が遅れているように感じているかもしれない」信者の誠実な疑問に答えて行きます。私たちも、このことは感じるのではないのでしょうか？ペテロの時代、彼が殉教する直前の時に比べたら、私たちは1900年ぐらい経っているのですから、なぜ主が来られるのが遅いのか？という心にある疑問があります。ですから、なおさらのこと「主の来臨の約束」については、なおがしろにされていきます。しかし、次のペテロの言葉によって、私たちがしっかりと、純真な心を保っていることができるようにしていきたいと思います。

### **1B 一日と千年 8**

8 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。

「しかし、愛する人たち。」と始まっています。主の来臨をあざける者たちに対して、主の来臨を待ち望む者たちに対して、愛する兄弟としてペテロが語りかけています。「この一事を見落としてはいけません」と言っていますが、主の来臨について考えたりしている中で、見落としてしまうことがあります。その盲点になっている部分を突いています。

それが、「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです」ということです。私たちは、この神の視点をもって生きる必要があります。これは、時間に制約されている人間ですから難しいかもしれませんが、永遠の神である主が時をどのように見ておられるのか、それを少しでも感じ取るとよいでしょう。詩篇 90 篇 3-6 節を読みます、「あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようです。あなたが人を押し流すと、彼らは、眠りにおちます。朝、彼らは移ろう草のようです。朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます。」私たちの命のはかなさを教えています。私たちが長寿だとしても、たかが今では100歳でしょう、しかし神の目にはほんとうに一時であることを教えています。ここに千年が昨日のように、つまり一日のように過ぎ去るのだということです。そして、夜回りの一時とは夜番の四時間であります。一日の六分の一です。創世記 5 章に 900 年以上生きる者たちがいますが、それもたった一日、いや数時間でしかないということなのです。これだけ、神は力強く、永久まで治めておられる方だということです。

同時に、「一日は千年」のようでもあります。これは、主の前にいることがたとえ、それが一時であるとしても、永遠の神に見えるその時は千年のようであるということです。似たような表現が、詩篇 84 篇 10 節にあります、「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。」神の救いのご計画を考えてください、永遠の救いを与えるために、神は、たった三年ぐらいの期間だけをお与えになりました。イエス様が生まれ、およそ三十歳の頃に公生涯を始められ、三年半ぐらいして十字架に付けられました。その十字架刑は、ほんの一日です。いや六時間だけでした。しかし、どれだけの紙面を福音書は裂いているでしょうか？時系列的に福音書は書き記されていますが、イエス様の最後の週、最後の時間、そして十字架に付けられている時、この時が最も長く書かれています。なぜなら、そこで、永遠の救いを与える時間だったからです。その一日は千日いや千年、いや永遠の重みがありました。

このような視点から、私たちは主の到来を思います。実に神は、終わりのことを事の始まりから語られる方です。主がイスラエルの父祖アブラハムに、「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。(創世 12:3)」と言われましたが、これが完全に実現する時はいつでしょうか？そう、主が再臨される時です。「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。(マタイ 24:15)」そして千年王国で、世界の諸国、諸民族が、エルサレムに上って来て、そこにおられる主を礼拝しに来ます(イザヤ 2 章)。ですから、紀元前二千年ぐらいの時に、紀元後二千年にもまだ完成していない事柄を、主が既にお語りになっていたのです。主はイザヤを通して言われました、「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる。』と言う。(46:10)」

## 2B 忍耐深い方 9

そしてもう一つの理由があります。9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

「おそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません」であります。遅いと感じても、遅らせているのではない、ということです。この感覚をつかむことが大切です、主はご自分がなされていることをご存知です、何か計画通りに行かず予定時間をオーバーして遅らせているのではありません、遅くなっているように見えるのですが、遅れることなく必ず成し遂げられます。ハバククの預言にも、主は言われました。「もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。(2:3)」

そして、遅れているように見えるのは、「あなたがたに対して忍耐深くあられる」ということなのです。主の忍耐は、とても長く待つような忍耐です。待っていてくださいます。主が裁きを行なわれる



時のことを考えてみましょう、ノアの時代の洪水ですが、主は人の齢を 120 年とすと言われましたが、それはおそらく洪水までが 120 年までとすということです。そこまで、彼らが悪に傾き、暴虐に満ちていても、主は彼らのご自身に立ち返ることを待っておられました。ソドムとゴモラを滅ぼした時のことを考えてみましょう、二人の御使いがソドムを訪れ、ロトの家族を救おうとします。ところが、ロトの既婚の娘の家族は全然聞く耳を持ちませんでした。そしてロトがためらっているところで、御使いが彼の手を掴みました。今すぐにでも火の裁きが下すはずだったのですが、彼らがツォアルという小さな町にたどり着くまで裁きをできなかったのです。主が、待ってくださる方なのです。

そして、黙示録の裁きにもそれが表れています。地に鎌を入れる方として主が来られますが、14 章です、「地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ました」という言葉、「ぶどうはすでに熟している」という言葉があります。前者は、「収穫は乾いた」という意味です。つまり、収穫しなければいけないのに、水気がなくなるほど遅くなっているということです。そして、後者のぶどうは、ぶどうの実がはち切れるばかりになっていると言う意味合いがあります。こちら、ちょっと遅すぎるのです。ですから、そこまで主が待っていてくださっているということなのです。ということは、今が終わりの日であれば、主はちょうど、五時からの労働者たちのように、これまでにない大きな恵みを注いでくださる時代に生きていけると言えます。

そして、その目的は「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」ということです。これが主のお心です。「ルカ 5:32 わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」人々が悔い改めるための豊かな寛容と忍耐を示してください。悔い改めることによって、初めて主は豊かな憐れみを示し、すべての罪を赦すことができますから、悔い改めることができるようにあらゆる知恵を尽くして、罪人を招いてくださっておられるのです。

ですから、私たちの主を待ち望む姿勢というのは、神の宣教の思いと一対であります。主が戻って来られることと、主が大収穫を与えられるという思いは一対なのです。ですから、私たちは期待できます。主の忍耐によって私たちも忍耐を働かせて、福音の中に行きます。主の来臨をあざけるような風潮が、これからますます強くなるでしょう。反キリストの霊は、既に働いています。「しかし、神の人よ。あなたは、このようなことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和さを熱心に求めなさい。信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。(1テモテ 6:11)」